

国際演劇交流セミナー 2017-2018

International Theater Exchange Seminar 2017-2018

ごあいさつ

一般社団法人日本演出者協会 理事長
流山児祥

日本演出者協会の国際演劇交流セミナーが始まって今年で 20 年の節目の年を迎えることになりました、関係各位に厚く御礼申し上げます。1999 年から文化庁の本格助成も始まって協会国際部は世界各国の演劇人と出会いワークショップ、レクチャー、シンポジウム、リーディングなどを行う国際演劇交流セミナーを 20 年に渉って企画開催してきました。世界には、豊かで多様な演劇が存在することを学び、共有しあうことは演劇の根本である《他者》との出会いです。国際演劇交流セミナーは、日本演劇が思考してきている所謂、明治以降の近代劇＝欧米中心の思考をドラスティックに変え、演劇を必要とする世界各地の現代演劇のもう一方の豊かさ（オルタナティブ）を体験する旅でした。

2015 年には韓国、パレスチナ、オーストラリア、デンマーク、メキシコ、2016 年にはアフガニスタン、マカオ、ウェールズ、といった地域の特集。勿論、ロシア、フランス、イギリスといった国の演劇人との交流も同時に行っています。2017 年、2018 年の本合併号には韓国、フランス、台湾、アルゼンチン、スイス、デンマークとの試みの特集が掲載されています。わたしも参加したインドネシア、台湾、韓国の特集は貴重で面白い体験でした。わたしはインドネシアには 2 度公演してインドネシア演劇が如何に社会に、地域に根差しているか、その身体表現の豊かさの根源を共にワークショップすることで再確認しました。韓国演劇のトップシーンを牽引している劇作・演出家：パク・クニョン氏の独自のワークショップは日本の若手演出家にとって目から鱗のプレゼントになりました。今、韓国と並び最も芸術に力を入れている台湾のトップ・リーダー：汪兆謙氏のドキュメント演劇も多くの参加者を集め好評でした。また、アルゼンチンのエミリオ・ガルシア・ウエービ氏の「既成概念を揺るがす演出を～その創造のプロセスとは何か～」は京都と東京の 2 か所で各 6 日間開催し多くの参加者がアルゼンチンの鬼才と衝撃的な実験を重ねました。舞台芸術は既成概念の破壊とその後の創造の果てにあるのです。

世界中の地域の演劇人、演出家と出会い彼らが彼の地で実践している演劇の多様性を学び共有し、共に実験して、社会に向けて普及のための公演を行うことで日本の演劇人、とりわけ若い世代の演出家を育

成する事業が国際演劇交流セミナーです。演劇の持つ真の自由さを獲得し、社会という《他者》のために文化芸術は存在します。地球上、それぞれの場所の必要性から生まれる演劇の多様性を重視することはわたしたちの課題です。いま、世界はネオ・ナショナリズムとポピュリズムの波に翻弄されています。日本の若者たちは「私はダメだ」「俺はクズだ」と思う人が米・中・韓と比べて突出しているという検査結果が出ています。スマホとインターネットの谷間に「わたし」という「個」が孤立し彷徨う 2019 年の現在です。まもなく、改元。日本を変えたあの 3・11 東日本大震災から 8 年です。3・11 を忘却の彼方に押しやるのではなく、忘却の痕跡を自らの身体に刻むのがわたしたち表現者（当事者）の仕事です。2015 年、東京と福島で開催したパレスチナ特集で来日したイエスシアターと福島の演劇人の交流は今も続いています。演出家：イハップ氏は「文化なしの闘争はない、社会にとって演劇は必要不可欠だと想える若い世代を育てたい」語った言葉は今も生きています。この想いがこの事業の根本です。

2020 年代をどんな時代にしたいのか？ が演劇人に問われています。少子高齢化の超格差時代到来が予測される時代、わたしたちは決してネオ・ナショナリズムやポピュリズムに屈することなく国境を越え世界の演劇人たちとともに歩んでいきます。

また、企画の具体化にあたっては、多くの研究者、翻訳家、評論家、関係各国の大使館、国際交流基金などにご尽力いただいていることに感謝、そして何よりも文化庁のサポートに厚く御礼申し上げます。そして、何よりも、この年鑑が多くの若い演劇人に読まれることを切に願っています。

(2019 年 3 月 5 日)

デンマーク 特集

【INTRODUCTION】

古典喜劇を演出する！

企 画 ： 佐々木治己

デンマーク特集 2017

デンマークに関して、国民一人あたりの年間観劇回数が多いことや、社会的な不正の少なさや、社会福祉等々により幸せの国として知られることなど、前回のデンマーク特集でも触れることがあった。観劇回数の多さが現地の演劇に与える影響があるのかどうかは分からないけれども、実験的な演劇が世代を超えて注目されていることなどは、観劇回数とも関係のあることなのかもしれない。また、幸せの国として理想化されるデンマークにももちろん問題はある、生き難さを抱えた人々について書かれた戯曲を前回は紹介した。

当初、このままデンマークの現代劇を連続的に紹介していく企画にできればと思っていたが、デンマークで活動する劇作家マス・マザンチ・イエンセン氏より、現代のデンマーク演劇を知るには、まず、デンマーク演劇の古典を知ってもらうことが重要だという提案があった。これはデンマーク演劇だけのことではないと思うが、前回紹介したデンマークの現代演劇を見た参加者からは「ドイツ演劇に似ている」という意見があった。デンマークの若い演劇人たちはドイツに留学していることも多く、特に実験的、先鋭的な作品を作る劇作家、演出家は、ドイツ演劇の影響をなんらかの形で受けていると思うことがある。これを同時代性と明るく受け止めることもできるだが、一つの定型に陥っていると考えたとき、イエンセン氏から提案された古典からの見つめ直しは意義あることのように思えた。

イエンセン氏からは、ホルベア『丘の上のイエッペ』が紹介された。ともにデンマーク特集の企画を担当していた故青井陽治氏より、日本でも上演されているということや、内容について説明を受け、人文主義と喜劇というテーマから演劇の社会性と演技の質の関係等、演劇を掘り下げる企画になった。そして青井氏による事前勉強会も同時に行うことになっていたが、青井氏の病状が悪化したため、青井氏が参加することはできず、電話による相談と報告が中心になり、その後、青井氏はこの世を去ってしまった。

ホルベアに関しては、岩波書店からユートピア旅行記叢書 12 巻に『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』（ホルベリと表記されている）が全訳ではないが収められている。喜劇が持つ批判精神などはここにも描かれているので、興味のある方は是非読んでいただければと思う。

セミナーは、長年、ダリオ・フォの翻訳、通訳を務め、ホルベアの研究者としても著名なベント・ホルム氏のレクチャーを中心に、古典喜劇が持つ構造が現代の喜劇にも通じていることなどが展開され、毎度馬鹿馬鹿しいというフリをしながら社会に対する鋭い視線を持った喜劇の力強さが示された。ダリオ・フォの映像なども喜劇の演技性を考察する上で参考になった。演出家ジャコモ・ラビッキオ氏によるコメディアルテを基礎とした場面作りはとても丁寧で、参加者は細かな動き一つ一つを確認することになった。

担当者として心残りなのが、この企画がデンマークの古典劇から現在のデンマーク演劇の根源を探る企画になればと思っていたにも関わらず、ホルベア自身がデンマークの作家というより広くヨーロッパ的な人文主義者だったように、この企画もイタリア演劇に造詣の深い二人の講師により、喜劇の深さを感じることはできたが、デンマーク演劇を特筆するものにはならなかったことである。しかし、一つの国の特徴を述べることは、演劇において求められていることではないのかもしれないとも思わされた。

【 in 東 京 】

2017 年 6 月 26 日(月)～7 月 2 日(日) 会 場：芸能花伝舎

【ワークショップ】

デンマーク演劇の古典であるホルベア『丘のイエッペ』を、講師と共に分析。
最終日の発表を目指して、立ち上げを試みた。

■ 1 日目 6 月 26 日(月)13:00～17:00

3 名の講師の紹介と、参加者の自己紹介から始まり、テキスト分析を始めていく上で必要なことを共有した。ベントによる、ホルベアという作家についての説明と、テキストを理解するための“ツール”についてのレクチャー。また、シーン創りの手がかりとなるエクササイズも行った。

■ 2 日目 6 月 27 日(火)13:00～17:00

『丘のイエッペ』を立体化していく作業。前半はベントが担当し、コメディア・デラルテについてのレクチャー。後半は、ジャコモによる実践。その場で短いシーンが渡され、10 分間という時間が与えられる。「セリフを覚える時間としては短い。話の本質をつかむこと」というジャコモのアドバイス。参加者それぞれが発表を行った。

■ 3 日目 6 月 28 日(水)13:00～17:00

最終日の発表会案が提案される。講師からの提案は、作品を 5 つのシーンに分け、ジャコモが演出するシーンでは全員が俳優として出演し、ほかの 4 シーンは、そのグループ内で演出家を立てシーンを作ってはどうか、というもの。参加者の了解を得て、早速 1 と 2 のシーンの稽古を行う。また、舞台美術家であるアネッテより、演出するツールのひとつとして、アネッテが『丘のイエッペ』から連想したカラーパターンが挙げられた。

■ 4 日目 6 月 29 日(木)13:00～17:00

引き続き、最終日の発表に向けての稽古を行う。シーン 1 と 2、そして、参加者全員が俳優として参加する、ジャコモ演出のシーン 5。ここまでを総括して、「コメディイはリアリズムに寄りすぎると伝わりにくく、しかし大袈裟でも伝わりにくい。そのバランスに気を配りながら取り組もう」とジャコモ。また、進行ペースの関係で、全部のシーンではなくシーンを選んで発表を行うことに。

■ 5 日目 6 月 30 日(金)13:00～17:00

前半は、参加者によるシーン 2 の演出プラン発表と、その実践。ワークショップ 3 日目にアネッテより提案されたカラーパターンについても話が及ぶ。後半は、ジャコモ演出によるシーン 3 の稽古。

■ 6 日目 7 月 1 日(土)13:00～17:00

講師からの提案で、発表会は取りやめ、シーン 5 に集中して取り組むことに。ベントより、シーン 5 の最後「エピローグ」の分析と、その役割についてのレクチャー。「エピローグは作家の言葉であり主張。この構造が理解できると、さらに分析や解釈のヒントになる」そして、参加者が準備してきた『丘のイエッペ』ショート・バージョンを全員で稽古して発表し、6 日間のワークショップを締めくくった。

【リーディング・シンポジウム】

7月2日(日)

■ 17:00～18:30 リーディング『丘のイエッペ』

〔演 出〕 公家義徳

〔出 演〕 北川聡（（有）キャラバン） 中山一朗 浅井純彦（東京演劇アンサンブル）
竹口範顕（東京演劇アンサンブル） 岩澤侑生子 加藤亮佑

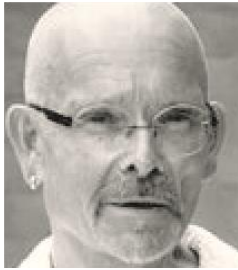
■ 19:30～21:00 シンポジウム「古典喜劇を演出する」

〔パネラー〕 ベント・ホルム ジャコモ・ラビッキオ アネッテ・ハンセン
毛利三彌（成城大学名誉教授） 公家義徳

〔司 会〕 鴻英良（演劇批評）

『丘のイエッペ』が上演された1722年当時のデンマーク演劇の状況、そして今現在、『丘のイエッペ』という作品がどのように捉えられているのかというところから始まり、古典喜劇を現代において演出する際に重要なポイントが、ベント、ジャコモ両氏より語られた。それを受けて、今回のリーディング公演の演出を担当した公家氏がコメントし、演劇学者の毛利氏がホルベアの啓蒙主義的側面を指摘。翻訳の問題から、当時のデンマーク演劇と支配層・観客との関係まで話は及んだ。

ベント・ホルム / Bent Holm



ドラマトゥルク、演劇学者、翻訳者。2014 年までコペンハーゲン大学で演劇学を教える。ダリオ・フォをデンマーク語に翻訳したことでも知られている。専門は、ホルベア、イタリア喜劇、ダリオ・フォなど、著作多数。また、ドラマトゥルクとしての活動も多く、1993 年から、演出家アスガー・ボンフィスと数々のホルベア戯曲を上演した。2003 年からは、演出家ジャコモ・ラビッキオに協力している。

ジャコモ・ラビッキオ / Giacomo Ravicchio

演出家。イタリア生まれ。マジック・リアリズムと詩とユーモアを交え、映画のようなビジュアルを持ったスタイルが評価されている。1974年から 1995年までトリノの Teatro dell' Angelo で 30 公演以上演出をしたのち、1996年、劇団 Meridiano を創立。2003 年からベント・ホルムと協力し、ホルベア戯曲なども上演している。近年、演出家、作家として、中国と日本の劇団から招聘され、創作を行った。



アネッテ・ハンセン / Anette Hansen



舞台美術家、デザイナー。1972 年より、舞台美術として公演に参加し、デンマークだけでなく、ドイツの劇場などで人形劇やオペラの舞台美術、衣装を手がける。またデンマーク国立演劇学校にて舞台美術、衣装を教える。博物館などの展覧会のデザインなどの活動も行なっている。

〈ホルベアについて〉

ルズヴィ・ホルベア Ludvig Holberg (1684-1754) は、ノルウェー生まれのデンマークの学者、劇作家です。イタリアとフランスのコメディから影響を受け、人間の愚かさについての様々な有名な喜劇を書きました。しかし、ホルベアの喜劇は人々に笑わせる戯曲だけではなく、人間の意識の黒い面を見せる政治的、哲学的な作品であると評価されています。現在でも、ホルベアは、デンマークの一番大切な劇作家として、毎年、新しいバージョンでデンマークのさまざまな劇場で上演されています。

【 THE TEXT 】

■ シンポジウム「古典喜劇を演出する」

〔パネラー〕 ベント・ホルム ジャコモ・ラビッキオ アネッテ・ハンセン

毛利三彌（成城大学名誉教授） 公家義徳

〔司会〕 鴻 英良（演劇批評）

シンポジウム「古典喜劇を演出する」19：30 ～ 21：00

○ 佐々木

シンポジウムをはじめたいと思います。まず、パネラーのご紹介です。ドラマトゥルク、演劇学者、翻訳家、ダリオ・フォの専門家でもあり、ホルベアの専門家でもあるベント・ホルムさんです。そして、デンマークでも演出家として活動しているイタリア生まれの演出家、ジャコモ・ラビッキオさん。舞台美術家、デザイナーもされているアネッテ・ハンセンさん。みなさん、デンマークからいらっしゃいました。

そして、リーディング上演を演出された演出家の公家義徳さん。演劇学者の毛利三彌さん。それから司会者ですが、チラシにあるように、青井陽治さんの予定でしたが、体調を崩されてしまい、ご本人がとても楽しみにしていた企画でしたが、数日前に来ることを断念されました。急遽の代役をと、演劇批評家の鴻 英良さんをお願いしたところ引き受けてくださいました。鴻さん、よろしくお願いします。



○ 鴻

急遽ということで、早速台本を送ってもらって本日に臨みました。演劇といっても色々あるわけですが、喜劇ということがどういう問題なのか？ その中でも古典喜劇と限定したときに何が問題になるのか？

コメディ（comedy）という言葉があります。実は、日本語にしたときに大きな問題があります。日本語だと喜劇と翻訳されてしまうため、喜びに満ち溢れている演劇と思い込んで観られるわけですが、コメディという言葉の中に、喜びという意味は、本当はないのです。また、トラジェディー（tragedy）、悲劇と翻訳されますが、こちらも悲しみという意味は全くないのです。日本人は演劇を考えると、すでに誤解から始まっているわけです。

ですから、今日は、デンマークのみなさんがコメディと発言されると喜劇、喜びの劇と日本語に翻

訳されてしまいます。トラジェディーと言うと、悲劇、悲しみの劇と翻訳されてしまいます。この点をご承知頂いて、お話をさせて頂ければと思っています。

ホルベアについては、私も詳しくは知りません。専門家の人たちを除くと、ほとんど日本では知られていないデンマークの作家だと思います。この点で、以外にも興味深いのは、1722年に『丘のイエッペ』が上演された当時のデンマークの状況。さらに、デンマークにおける演劇人たちの社会的地位、あるいは、観客がどういう人たちだったのか？ また、この作品は、どのような社会状況のなかで、どういう人たちで上演され、どのような形で問題にされたのか？

これらを踏まえた上で、今、古典喜劇を演出するときに何を考えたら良いのか？ おそらく日本で上演する場合とデンマークやヨーロッパで上演される場合には、違った問題が出てくると思います。はじめに、デンマークの方にお話を頂いて、その後に、毛利さん、公家さんにお話を頂ければと思っています。

○ ベント

まず、デンマーク組を代表して、本日はお招きを頂いた事を感謝いたします。そして、素敵なリーディング公演もありがとうございました。今日の上演を見て、みなさんが、どのように感じたか知りたいところです。

このコメディーが上演されたのは 1722 年。ちょうどその年に発足された、プロの演劇団体の上演演目のひとつでした。

まず、なぜ、デンマークの劇団は、デンマークではじめて上演される演目のひとつとして、この作品を選んだのか？ この時代には、人口のほとんどが農民で形成されていました。彼らは貧しく、読み書きもできず、奴隷のような生活を送っていました。この作家、そしてこの作品は、人々の知的レベルや文化レベルを押し上げるムーブメントのひとつだったのです。作家ホルベアは、現実がひっくり返ったような夢の話を選びました。現実から逃げてはいけないという事を見せたかったのです。自分が何者であるか。自分自身で発見していかなければならない。という事を突きつけたかったのです。「私はコメディーを通して、読み書きができない農民たちを市民に変える事ができた」1754年にホルベアが亡くなる前の言葉のひとつです。

次に、このコメディーが、今、どのように捉えられているか？ これはコメディーとは何かという問題にも関わってくる、とても危険な質問です。なぜなら、クリシェ（ひとつの典型的なイメージ）に引き寄せられる可能性があるからです。現在のデンマークでは、コメディーとして上演される作品には、逆説や問題を突きつけるものは、ほとんどありません。そこには、人々が見抜く目を持っていないという問題、演出家や芸術監督が面白く笑える作品を上演すれば多くの観客が来場することが分かってしまった、という問題があります。それに加えて、ジャンル分けという問題もあります。この『丘のイエッペ』を、現在のコメディーやコミックシアターという括りに入れてしまうと、全くもって平凡でつまらないものになってしまいます。

このような状況と、どうやって付き合っていくか？ 私たちが『丘のイエッペ』を上演したときの話をします。私がドラマトゥルクをつとめた作品です。出発点は文脈です。まず、一番はじめに上演を観た当時の観客の視点。彼らにとっての現実は何だったのか？ 彼らが観たイメージや、反応したメタファーは何だったのか？ 彼らは何を信じていたのか？ このやり方が、テキストをコメディーと捉えるより、遙かなに可能性があると感じたからです。

わたしは、『丘のイエッペ』を基本的には、悲劇的な物語だと感じています。ホルベアは、イエッペを通して現実の辛さからカオスの中に逃げてはいけない、というメッセージを伝えたかったのです。そして、気の弱い少しお馬鹿で頼りない、みんなが気に入る人物像を考えたのです。このような逆説的な部分が作品を作り上げています。

このようなテキストの研究と分析を行った後に、今度は現代の文脈について考えました。そこで、同じ質問を自分たちに投げかけました。現代の人たちが、どのような考えを持っているのか？

どのようなものを信じるのか？ そして、ようやく私たちは、現代の文脈の中でのアーティストとして、芸術的選択を行っていくことができた。このことによって、典型的なコメディの枠から外れることができたのです。ある種、当時と現代という2つの対立する問題を、ブレヒト的に投げかけた作品となりました。まずは、ここまでにします。

○ 鴻

この時点で質問がある方はいらっしゃいますか。

○ 参加者

リーディングでは、女性の俳優が一名出ていました。上演当時は、男性が演じていたのでしょうか。

○ ベント

それについては議論を深めることもできますが、簡単に言うと、最初のデンマークの劇団が立ち上げられたときには、女性の役は女性によって演じられていました。ときには、年をとった醜い女性の役は男性が演じたり、仮面を付けたりすることもありましたが、基本的には女性の役は女性によって演じられてきました。

○ 毛利

18世紀、既にヨーロッパでは女優がいました。女形は、シェイクスピアの時代までになります。

○ 参加者

ベントさんが関わった『丘のイエッペ』を上演するにあたり、当時と現代の視点をリサーチされた伺いました。ベントさんは、古典に関わる場合には、いつもその方法で行っていますか？

○ ベント

いつも同じ方法、同じアプローチです。ある意味では責任感を持って、そうしなければならない、と感じています。

○ 鴻

次は、ジャコモさん、お願いいたします。

○ ジャコモ

私が話したいのは、古典をどうやって現代で上演するか？ ということです。『ハムレット』を例にしますと、ハムレットが宇宙飛行士のような格好をして火星にいる設定の作品をずいぶん昔に観ました。それは、私にとっての現代化とは違います。私たちが考えなければならないのは、今の現代化ではなくて、いつまでも現代的であるということです。

私が目指すのは、普遍化していくことです。そうでなければ、私たちは形式やフォルムを話すことになるからです。もちろん、分析していく上で、文脈的に宇宙飛行士ならば構わないです。それは意味があることですから。

物語を普遍化、むしろ、生きたものする、という言葉にしたほうが良いかもしれません。古典的な衣装で『丘のイエッペ』を上演しても良いのですが、今、生きていることが重要です。どうしたら観客が共感できるか？ を、自分が演出をするときに考えています。

○ 鴻

質問がある方はいらっしゃいますか。

○ 参加者

普遍的な作品を書いている現代の作家も沢山いると思います。あえて古典を上演する意味があれば教えて下さい。

○ ベント

私たちは、古典も現代劇も上演します。私たちは上演する上で、重要な特定のモチーフやテーマがあるのです。それは、今、生きている我々の生活に関することです。それを伝えるためには、観客を常に不安にさせたり驚かせる必要もあります。たとえば、『丘のイエッペ』くらいの古典だと、観客はある程度、作品のことを知っています。私たちは、それを全く違った方法で上演する。既存のイメージを覆す、そのために古典を使うことがあります。そこには強いアイデアが必要です。

○ アネッテ

私が、『丘のイエッペ』の舞台に関わった経験を、舞台美術や衣装の観点から語ろうと思います。

私の古典作品での取り組みは、当時の場所、社会情勢について調べるところからはじまります。当時の素材、生地についても調べました。過去からは、沢山のインスピレーションをもらいました。色を参考にすることもありましたが、シルエットを活用したりもしました。大事なものは、過去は宝物である、ということです。



○ 鴻

これまでの話を受けて、リーディング作品を演出された公家さんから、お話をいただけますでしょうか？

○ 公家

私は、プレヒトの芝居小屋という劇場を持っている、東京演劇アンサンブルという劇団に所属しております。そのため、翻訳物に関わるが多く、また、デンマークはドイツの北ですから、この作品の演出依頼を受けた際には、大きな違和感はありませんでした。常々、西洋の翻訳劇を上演するには、時代における思想、哲学、背景となる歴史を知らないと感じています。

この作品を読んだとき、まず面白いと感じました。ただ困難もありました。稽古も 5 日間しかない状況で、しかも、私の手元には 4 つの台本がありました。最初に頂いた台本は、地人会にて富山弁で上演されたものを標準語に直した台本。次に届いたのは、毛利さんが翻訳された大阪弁の台本。そして、デンマーク語から英文に翻訳された台本。新たに、ワークショップでは使用されている英文を日本語訳した台本も届きました。解釈によって、内容が逆になっている台本もありました。これには、少し戸惑いました。

一番困ったのはエピローグでした。使われている英文内の単語の意味ではなく、なぜこのテキストの箇所、この英単語が使われているのか？ この単語で、すべての意味が逆転してしまうのではないかと。昨日、毛利さんにアドバイスを頂いて納得したのですが、エピローグのシーンは最後まで悩みました。

○ 参加者

私たちのワークショップでも、エピローグをどうするか？ 議論になりました。デンマークでは、このシーンのセリフを舞台の外に出て言う試みだったそうです。ほかの上演では、笑いながらセリフを言うという演出があったとも。日本の上演ではカットされたようです。

○ 公家

この作品は、時代によっても解釈を変えることが可能だと思います。ただ、私は、今回上演するにおいては、民衆側にも権力側にもどちらにも加担しないようにと考えました。

○ 鴻

毛利さんは、今までの話を聞いて、どのようにお考えでしょうか。

○ 毛利

古典喜劇を、今、どう扱えばよいのか？ ということは、みなさんがこれまでお話されていたことに、基本的に相違ありません。

ただ、今回、古典喜劇として日本では非常に珍しいホルベア、なおかつ、『丘のイエッペ』を取り上げたわけですから、いったいこの作品はどういう作品で、ホルベアとはどういう作家で、私たちにとって、どんな意味があるのか？ デンマークの方々から、このような話はなかったと感じています。

そのひとつには、言語の問題があると思います。彼らは、デンマーク語で、デンマークで上演をしています。ホルベアは国民作家です。イギリスでいうと、シェイクスピアのようなものです。デンマークでは、ホルベア作品は毎年、何度も上演が行われています。演出家が自分の実力を試すことにも使用されます。ですから、台本を変えることも行われます。

ホルベアは、私たちにとっては知らない作家です。私もホルベアを専門にやっているわけではありません。しかし、少なくとも『北欧演劇論～ホルベア、イブセン、ストリンドベリ、そして現代』を1980年に発行する際に、かなり詳しく調べました。

そこで、大変不遜ではありますが、ホルベア、特に『丘のイエッペ』に関して、どうもデンマークの方々に誤解があるのではないかと感じました。問題は、最後のエピローグのところですが、エピソードは、最後に作者が言いたいことを言う部分です。英訳が分かりにくかったのは、エピソードが韻文で書かれており、それを英文でも韻文として書いたのです。ですから、原文とはだいぶ違ってきます。しかし、意味合いは当たっています。「身分制度を守れ」と言っています。

確かに、「身分制度を守れ」ということを、今の時代にそのまま受け入れるわけにはいかないと思います。ですから、おそらくベントさんの解釈としては、イエッペは現実逃避をしている、それをホルベアは戒めとして書いているとお話されました。しかし、18世紀、ヨーロッパ全体は啓蒙主義の時代に入ります。知識階級が、文化的に遅れている連中を引き上げることが、啓蒙主義の本質です。デンマークでは、スウェーデンに負けて、農民は惨めな状況になっていましたが、ようやく知的な生活がはじまった時代です。ホルベアは、実は、ノルウェーの港町の生まれで、デンマーク人ではありません。生まれは悪くなく、しばらく放浪して、デンマークのコペンハーゲンの大学教授になり、喜劇作家にもなるのです。ホルベアは田舎暮らしも経験しており、彼は知識階級でありながら下層階級に対して非常に理解があり同情的だったというのが、私の考えです。

ホルベアの創作劇で、デンマークにて最初に上演された『鑄掛け屋政治家』、そして『丘のイエッペ』でも同じく、ホルベアは明確に現実を見据え、支配階級がどれだけ農民たちを押さえつけているのか？そのカラクリを演劇で見せていたと、私は思っています。加えて、ホルベアの代表作『エラスムス・モンターヌス、またはラスムス・ベア』では、知識人の批判を行いました。ホルベア自身も知識階級ですから、一種の自己批判があるわけです。私は、ホルベアを啓蒙主義として、非常に優れたところを持っていると感じました。ですから、イエッペが現実逃避をした、というような農民を陥れる意図は決していないと思っています。

そして、このように、ホルベアは、いかに面白いという作家であるか。ということを伝えていきたいと思って著書に記しました。

**続き、詳細は、
国際演劇交流セミナー2017-2018 年鑑にて**

国際演劇交流セミナー2017-2018

—— 年 鑑 ——

■ 目 次 Index ■

2017

デンマーク特集 - ワークショップ・リーディング・シンポジウム	1
韓国特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	21
インドネシア特集 - ワークショップ・レクチャー	49
フランス特集 - ワークショップ・シンポジウム	93

2018

台湾特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	131
韓国特集 - ワークショップ	151
スイス特集 - ワークショップ	181
アルゼンチン特集 - ワークショップ・レクチャー・シンポジウム	199
国際演劇交流セミナー実施年表【1999年～2016年】	241



■ ご希望の方は、日本演出者協会 事務局までご連絡ください。

TEL : 03-5909-3074 / FAX : 03-5909-3075 /

E-mail : j_d_a_info@yahoo.co.jp